

小説
湖底

藤
森
栄
一

『小説湖底』

著者略歴

明治44年8月15日長野県諏訪市に生まれる。昭和4年諏訪中学卒業。その後多くの職業に従事するかたわら考古学研究をつづける。昭和39年、第18回毎日出版文化賞受賞。著書には「かもしかみち」「石器と土器の話」「諏訪地方古墳の地城的研究」「銅鐸」「旧石器の狩人」「古道」「井戸尻遺跡」「井戸尻」「縄文の世界」「埴科の土笛」「遙かなる信濃」「信濃のみず」「縄文農耕」「小説宗門帳」他がある。

『小説湖底』

六八〇円

昭和46年4月5日 初刷印刷

昭和46年4月10日 初刷発行

著者◎ 藤森栄一 ふじもり えいいち

発行者 鶴岡匠巳

発行所 学生社

東京都千代田区九段上

編集担当 高坂愛子
落丁・乱丁本はお取替えします

0093—260250—1017

目次

陣中万能膏……………三

湖底……………五

陣中万能膏

かわった手紙も来るものである。

その大きな封筒は、地方史学会の北川教授から、諏訪史話会の私あてに來た大型封筒だが、中には、その北川教授の添書と、そして長い英文の手紙とが入っていた。英文の発信はボストン大学の高名な史学者アレクサンダー教授。北川教授のはその邦訳をタイプでコピーしたものである。ところが、それが、書き出しからすごく変っている。

へわれわれは一人の日本人を捜している。けれど、住所も、名前も、肝心な生存年代もわかっていない。▽

以下こんな調子だから、訳文自体はひどく抽象的夢幻状態だが、内容はすごくかわっている。いったい、それは史実なのか、フィクションなのか、さっぱりわからない。それにしても、史実とすれば重要性をおびているので、放っておくわけにはいかない。とにかく、私が見てきたように、その要旨を復原すると、だいたい次のようである。

その少年は、夏の夕方になると、毎日丘へ登っていった。丘はいっぱいの森で、樺の巨木が茂っていた。その老樹の洞穴からは、無数のコウモリの大群が、夕空を覆うばかりにとび立った。湖からはその茜空^{あかねぞう}をめざして、雲のようなオオユスリ蚊（ウンカのことらしい）が発生する。コウモリは、そのオオユスリカを喰うのである。

コウモリの群は、黒い帯のように、その蚊の雲の中に突込んで、編隊をくずして、縦横にとび交う。帯はくねり、そしてうねり、球になり、散り、そしてまた集まる。少年は、日暮ごとにきて、その空中サーカスに見とれていたのである。

これは、いまふうにいえば、たしかに特殊児童である。

幾年かすぎた。

それまで、ただ、何となく眺めていたその少年の興味は、すこし前進した。

——なぜ、コウモリは衝突しないのだろう——

少年はぼんやりと長い間、それを考えつづけていたが、やがて階段を一つのぼった。少年はコウモリをつかまえてみたのである。指に噛みつき激しく抵抗したコウモリは、とらえて、畳の上におくと、おどろいたことに、まことに意気地なくぐたりとしていて、近くまで手をやっても、しらん顔、どうも眼がみえないらしいのである。

少年はまた一つの壁に当った。こいつ盲目めくらのくせして、なぜ、空中で衝突しないんだらう——何匹もつかまえてみたが、また同じ、こんどは、つかまえた数匹に布片を脚に結び、空へ放した。布片をひらひらさせている奴は、はっきりと盲目の証拠である。ところが群へかえったそいつらは、平気であの群の中へ混って、もとの通りサーカスをやっている。

少年はとうとう蠟燭をつけて、枯木の洞穴に入ってみた。コウモリは朽ちて露のしたたる天井に、いっぱいぶらさがっていた。逆さで、ミノを着たネズミのようである。かれの侵入にも平気で知らん顔をしてぶら下っている。

一匹にさわってみた。今度は飛び立った。さあ大変、洞いっぱい飛び交うコウモリは蠟燭を敲き消して拡がり、やがて、洞穴の小さな口から飛び出していった。

少年は、幼ないながら、一つの結論に達した。

——コウモリは飛んでいるときだけ、眼が見える——

やがて、少年は大きくなって、『鳥獣戯遊』という三巻の本を書いた。その丘や、湖や、小川にすむ、鳥や獣はもちろん、珍らしいさまざまな虫たちの生活の驚異を克明な写生図入りで、詳しく書きのこした。その中には、じつに鋭い、そして根気強い観察が充満している。がしかし、全文を通じて、かれの関心は、——飛んでいるときだけ見える不思議な蝙蝠こうもりの眼——に絞られていたように

ある。しかし、科学として発展するには、その時代という壁はあまりに厚すぎたようである。

『鳥獸戲遊』は、ほかの反古^{はご}といっしょに、売られて江戸へ流れてきた。

明治十一年、アメリカの浮世絵や陶器の蒐集家G・ゴーランドが、下谷黒門町の絵草紙店の店先で、雑本の中から、これを見つけた。ゴーランドは、その挿絵の見事にひかれて、買い取り、アメリカへ持ち帰った。

ゴーランドの没後、『鳥獸戲遊』はほかのかれのコレクション、浮世絵や東洋陶器とともに、ボストン博物館に寄贈された。浮世絵や陶器は、優れた美術品として、博物館のメイン・ケースに飾られ、『鳥獸戲遊』は他の雑品と一緒に、倉庫の中にほうりこまれた。

それから、また、何十年かたった。

第二次大戦中のことである。米国の物理学者で、東洋美術の好きな某（とくに匿名にしてある）が、倉庫の中で、偶然に『鳥獸戲遊』を見た。彼はコウモリの項に引きつけられた。ゴーランドの英文附註によれば、日本産コウモリは、飛翔中しか眼が見えないと、至極当り前のように書いてあった。静止したとき見えなくなる眼、そんな眼がありうるだろうか。これは、いったい、何のことだ。

——要するに、コウモリは始めから盲目なんだ。では、なぜ、見えるのだろう——

彼は長いこと考えた。

——そうだ。超短波の反射に相違ない——

飛翔のエネルギーを電氣にかえる能力、それはあり得る。発射された超短波の反射を受信する能力があれば、刻々と変る前方の物体を感知できるはずだ。こうして、コウモリの諸器官の徹底的な分析が始められた。このアイディアが、肉眼で見えない遠方でも、暗闇でも、水の中でも、物の姿をとらえることのできる眼、電波探知機^{イリファインダー}発明のヒントになった。

コウモリのリーダー、言いかえると、日本の湖に近い、丘の上に立った少年の夢が、太平洋戦争で、修練無敵のはずだった日本海軍や空軍の精鋭を、徹底的に打ちのめしたと言える。

そして、アレクサンダー教授の手紙は、次のように結んであった。

「吾々は、その『鳥獣戯遊』の著者の名前を知りたい。リーダーの原理の発見者の、この少年のことを、できるだけ詳しく知りたい。確かにわかつていることは、少年の家の環境が、湖に近い樺の茂った丘で、稲田に湯が湧いていたということだけだ。日本人の先覚者の優れた学績^{フルバイト}を顕彰する意味からも、貴学の絶大な協力を期待したい。」

北川教授の添書も「どうもこういう手紙は、返答にこまる。いちおうは当地方史研究会の湖のある地方の会員に、手紙のコピーを廻した。まあ、こんな推理小説のような調査は、まず見込みなか

ろうと思うが、適当に返事を出してやってほしい」と附記してあった。

私は考えこんだ。

たしかに私は地方のアマチュア郷土史家だ。しかし専門は考古学、そんな新しい時代の人脈の詮議までしてはいられない。

それに、人をくったみたいで、ひどく、腹立たしい話だ。日本人の着想を、アメリカが利用して、戦いに勝ち、その戦勝者が、敗戦国の学会に、全然何も知らなんだ、その兵器の発明者を捜して欲しいというのである。戦いはすでに二十五年の歴史の彼方にある。恩讐はすでに去った。けれども、なんだか、自分の馬鹿さ加減を、自分で立証するような後味の悪さを感じないでもない。

しかし、それも、仕方ない。調査するとすれば、温泉の出る湖、諏訪湖など、たしかに第一候補である。けれど、こんな、夢のような資料だけを手掛りに、調査を始めたところで、駄目なことは初めからわかりきっている。私は、この手紙を、未済の書類ケースの中へ、放りこんでしまった。

——何だバカバカしい。俺は考古学者だゾ。はしくれながら——

けれど、どういうわけか、その手紙のことは、中々に忘れられず、たえず脳中を往来していた。べつに、リーダーで負けたのが口惜しかったのではない。私にはコウモリを観察した少年の気持

がよくわかるのである。

『鳥獣戯遊』の作者は変り者というか、一種の偏執者として、社会的には一向に使いものにならない型の人間である。その遺産が、日本近世社会にとつて、一束の紙屑でしかなかったように、一生を紙屑いじりで終ってしまふ人生はいくらかもある。科学者など、その分野の専門に入ると、常人の想像もつかないような、奇妙な研究に、平気で、一度しかない生涯をかける。

一体、そんな馬鹿ばかしいことを、調べて何になるか。誰かに聞かれたとしても、ただ笑つて、なるかもしれないし、ならないかもしれないと答えるだけである。

私は、京都時代に同じ下宿にいた生物学教室のSのことを思い出した。かれは下宿の部屋の畳の上に盥たらいを持ち込んで、ミズスマシを飼っていた。何とも不愉快な同居人である。眼が覚めると、Sはたくさんのガラ洋紙をかかえこんで、盥の前に座りこむ。そして、じっと水面をみつめていた。動くたびに、そのミズスマシの航跡を、一枚一枚、書きこんでいる。ねじり鉢巻で懸命である。昼飯もそのまま、眼は血走り、ちょっとした移動も見のがすまいという形相である。

「それ、どうするの？」

ある一日、私はとうとう最低の質問を発してしまった。Sは私をさげすむように、冷たい一瞥をただけで、また盥にしがみついた。

私は冷水をかけられたような悪感を覚えた。それは、どうも、Sではなく、研究者の風上にもおけぬ自分自身に対する嫌悪のようであつた。

いたたまれず、私はその下宿を逃げ出したことがある。

次の下宿では、また偶然、いまをときめく霊長類研究グループの一人といつしよだつた。そのUは大学生のくせに、毎日、公園の猿山のサルをみて暮らしていた。Uはお猿見物に成功して、文明評論家として名をなしたが、Sは気の毒だつた。戦後「ミズスマシの水面軌条における意識性の存在」という研究論文の最後の完成のため洛北の溜池につかつて、足を切つた。小さな痕なので放つておいたのがもとで、高熱を發して死んだ。ろくに病名もわからずじまい。最後に——いま一日……命がほしい——といったそうである。

ペニシリンでも買えたら、Sも死なないですんだらうに、……ペニシリン、そうだ、私の三女も戦後肺炎で死んだ。あのときも、ペニシリンさえあればと、私は走りまわつたが、あのときの私にとっては、まったくの高嶺の花だつた。本当にそうだつた。ペニシリンという薬……

私の連想は、コウモリから反転して、途方もない方向へはしりだした。

英国の生物学者フレミングが生涯をかけて、顕微鏡で黴かびをのぞいていたのも、ミズスマシやサル

を観察していたのと、ほぼ同じケースである。

いったい、ナチス・ドイツに先手先手をとられて、何となく急迫していた国内で、わけもわからぬカビをのぞいていて何になるか。それはまさに、なるかもしれぬし、ならぬかもしれぬというのが当たっていた。ところが、フレミングは妙なことに気がついた。一種の青カビがブドウ状球菌の繁殖をびたつと抑止してしまうのである。今からたった四十年前の一九二九年のことであった。

これも、別にどうということとはなかった。かれフレミングは生物界に普通の、生殺与奪の、生命の循環の一つの部分をとらえた、くらいにしか思っていないかったのである。

なぜ、この大発見が、それから十年も、レポートだけで放って置かれたのか。

この一九二九年という年は、ヨーロッパ全土に、ひどい経済恐慌のはじまった年だった。十月二十四日、ニューヨークの株式取引所で、有力株が思いがけぬ大暴落に転じたのがきっかけになって、パニックは電波と同じスピードで、ヨーロッパ、さらに南米に拡がった。生産過剰と買売力の減退が原因だった。イングランド・バンクが取付け騒動を起こし、ブラジル政府が、莫大な量のコーヒーを、価格の暴落を防ぐため海に捨てた前代未聞の事件も、この年のことである。フレミングの大発見が、一生物学者の思いつきとして、等閑視されたのも、一応は、やむを得ない時の情勢であったといえるだろう。

それから、十年たった。ナチが抬頭してきた。

ヒットラーは、チェコスロバキアに対して、ズデーデン地方の分割を要求した。英首相チェンバレンは、チェコを見殺しにすることによって、西欧平和主義者たちの喝采を博した。チェンバレンはナチを育てて置けば、後方のロシア共産主義への防壁ともなろうかと考えたわけである。これによって得た報酬は、ナチ・ドイツはこれ以上の領土的要求はしないという一枚の紙切れだけだった。それは——まさに——「恐怖の報酬」といえた。一九三八年九月一日、ナチは突然ポーランドに侵入した。第二次世界大戦が始まったのである。当然、英国民は最大の責任者の位置に立った。火中の栗をひろったわけである。三九年五月には、世界に誇った堅塁、フランスのマジノ線が、いとも簡単に破られた。独軍は怒濤のようにフランス全土を覆い、イギリス軍は懐しいドーバーの白い崖を眼の前に、ダンケルクの大壁の袋小路に追い込まれて、袋の中の鼠のように敵かれた。

英本土では、市民たちのあらゆる漁船、モーターボートが動員された。河からも、運河からも、鮒っ子のように集まってきた小舟は、群集してドーバー海峡を渡り、戦傷者、それから裸の兵員を本国に運んだ。ダンケルク死の撤退である。英本土は戦傷者の化膿臭で溢れた。

英国に課せられた当面の義務は、その傷病兵たちの治療である。化膿菌を適確に殺すものを捜せ、それは、ブドウ球菌を喰うものにかわり、偶然、十年前のフレミングの着想が甦ってきた。後継

した研究者は、フローリーとチェーン、例のブドウ状球菌の敵、微生物の正体の究明に本腰を入れることになったのは、こうした事情によるのである。

一日を急ぐ必要があつた。死は駄目で追いかけてきていた。英国生物学界はその総力をあげた。そして、フレミングの学績を基礎に、その黴の正体をつかんだ。培養試験、やがて、動物実験もできた。ここで若い医学者エブラハムが協力して、四一年、人体臨牀による化膿菌の抑制に成功するまでこぎつけた。

けれども、英国内は独軍の絨氈爆撃で、薬品製造どころの騒ぎではなかつた。フローリーは、即座に、研究データと、菌種をかかえ、飛行機で、大西洋を飛んだ。当時、アメリカはまだ中立国で、大陸戦の余慶から、生産力と技術は、最高に膨れ上つていた。こうして、全英国民の祈り、ペニシリンのマス・プロダクションが始まつたのである。

実際、そのため、連合国側の、どのくらい多くの人々が救われたものだろうか。当然といえば当然かもしれないが、この発明は枢軸国側には流されなかつた。日本にペニシリン学術協議会が結成されたのは、ようやく、戦後、一九四六年、アメリカの占領地政策の一つとしてである。

日・独・伊の枢軸国民や、気の毒な占領地域の人々は、まったくペニシリンを知らずに、悲劇的な戦争を終え、生き長らえるはずの、数え切れない多くの人命が消えて行つたのである。